

盛岡辯の形容詞の語法

橘 正 一

盛岡の形容詞を分けて、アイ型、オイ型、ウイ型、イ型、ツ型の五つとします。これは、語尾の形で分けたものです。

がい→が	あが	たが
がい→が	なが	なが
さい→さ	あさ	くさ
たい→だ	かだ	えだ
ない→な	あぶな	な
まい→ま	あま	せま
やい→や	はや	頬例なし
らい→ら	あら	くら
	(赤い)	(高い)
	(長い)	(苦い)
	(浅い)	(臭い)
	(堅い)	(痛い)
	(危い)	(無い)
	(甘い)	(狭い)
	(早い)	(暗い)
	(荒い)	

わい→わ	よわ	こわ
こい→け	まるけ	かるけ
こい→げ	めげ	類例なし
そい→せ	おせ	ほせ
ぞい→ぜ	むせ	類例なし
どい→で	ふて	のおぶと
ほい→べ	ひで	くで
	えから	えから
	(弱い)	(こわい)
	(圓い)	(軽い)
	(めい)	
	(逃い)	(細い)
	(むぞい)	
	(太い)	(おぶと)
	(ひどい)	(くで)
	(えから)	(えから)

わい→わ、よわ(弱い)、こわ(こわい)以上九項です。この外に、しうばい(鹽からい)があります。語原も不明であり、他に、類例も見出せませんから省きました。

よい→え つえ (強い) 、え(良し)
 ろい→れ ひれ (廣い) くれ(黒し)
 をい→ゑ あゑ (青い) 類例なし
 以上十項です。この外、違いがトエとなる例があり
 ますが、分類に惑ひます。また、「良い」は「いい」を
 通して、エになつたものとすれば、オイ型に屬さな
 いこととなります。

うい型(うい→うい→う)

ぐい→ぎ ぬぎ(ぬく) ひぎ(低い)
 すい→し(す) やす(安い) うす(薄い)
 づい→ぢ(づ) あづ(暑い) きづ(きつい)
 ぶい→び すび(涼い)
 むい→み さみ(寒い)
 ゆい→い か、(痒し)
 るい→り(る) ふり、ふる(古い)わり、わる(悪い)
 うい型(うい→うい)
 きい→き おき(大きい)
 しい→し→す すずす(涼しい)
 けわす(険しい)
 やさす(優しい)

以上挙げたのは、すべて、連體形、終止形の形です。

トモや、バに續く時も、やはり、この形から續きます。
 その例

あさども(浅いけれども) あさば(浅ければ)
 ふてども(太いけれども) ふてば(太ければ)
 ひぎども(低いけれども) ひぎば(低ければ)
 けわすども(険しいけれども) けわすば(険しければ)
 修正形から、助詞のカラに續く語法があります。但し
 このカラは、東京のナラの意味に當るものです。

ながから 買へ(無いなら、買へ)

ふてがら 削れ(太いなら、削れ)

あづがら ぬげ(暑いなら、脱げ)

形容詞の終止形から、直接、べに續く事もあります
 下の様に言ふ方が普通な様です。

寡 多

浅いでせう あさべ あさべ

太いでせう ふてべ ふてがべ

低いでせう ひぎべ ひきがべ

険しいでせう けわすべ けわすがべ

「あさがべ」「ふとがべ」「ひくがべ」と言ふべき所です
 が、訛つて右の様に言ふのです。すべて、副詞の言ひ方
 には二た通りあります。

下段は、女子供の甘たるい言ひ方とされてゐましたが、
 今では、この方が優勢です。語根に、ガルを附けて、動
 詞とする場合にも、同様、二た通りあります。

甘がる	うまがる	寡	うまがる	多
むぞがる	むぞがる		むぜがる	
寒がる	さむがる(多)		さみがる	
危なつらすな	危なつらすな		くさつらすな	
くさつらすな	くさつらすな		さみつらすな	
さみつらすな	さみつらすな			

語根にツラスナを附けて、非難の意味を表すことがあ
 りますが、この場合にも、二た通りあります。

ツ型の形容詞

ツ型の形容詞といふのは、擬容語にツを附けたもので
 す。その例、

びかびかづ (びかびかする)
 どろどろづ (どろどろする)

ゆらゆらづ (ゆらゆらする)
 ぐらぐらづ (ぐらぐらする)
 ぽかぽかづ (ぽかぽかとする)

以上は終止形、連體形の形です。この用法

刀 終止形 連體形
 びかびかづ びかびかづ 刀

水、どろどろづ どろどろづ 水

齒 ぐらぐらづ ぐらぐらづ 齒

これがドモ・ベ・カラ等に續いて次の様になります。

びかびかづども (びかびかするけれども)

びかびかづば (びかびかすれば)

びかびかづがら (びかびかするなら)

ツの代りに、ドとすれば、普通の副詞となります。

びかびかど 光る

どろどろど 濁る

ぐらぐらど 動く

トを下に濁るのは盛岡辯の法則です。但し、このドは、
 鼻にかゝらないから、普通の語尾にあるドとは、
 明かに、區別されます。従つて、窓と的、二度と二斗と
 を間違ふ様なことは、決して、ありません。「木」と「又」
 「派手」と「果」も同様區別がはつきりしてゐます。と

ところが、チ・ツとなると、鼻にかゝるか、かゝらないか、従つて、本来の濁音か、訛りの濁音かといふ區別が、少しあいまいです。クズ(厩)とクヅ(靴)、ハジ(端)とハチ(八)などは、アクセントのあり場所が違ふからいゝけれども、マヅ(先づ)とマズ(松)などはやゝ感ひます。

私は、ここに、ズとヅとを書き分けて來ましたが、これは、ズとヅとの區別が存在するといふ意味ではなく、さういふ歴史的假名づかひとは關係なしに、たゞ、地方にある二た通りの發音を、便宜上、歴史的假名を使つて表はしたといふまでです。つまり表音文字として、歴史的な文字を代用したに過ぎません。盛岡にはズヅの區別がありませんから、小豆をアズキ、盃をサカズキ等といふ風に、一方で統一しようといふ考へに反對すべき理由は音聲上は、存在しません。たゞし、方言獨特の音まで、ズとすることは困ります。といふわけは、例へば、クズと書けば、靴でなく、厩と讀まれてしまふからです。で私は、靴の方はクヅと書きます。もし、靴をクズと書きたかつたら、厩の方は「くず」でも書いたらよいでせう。たゞし、こゝのンは、鼻にかゝるといふ記號で、一音節ではありません。鼻にかゝるといふのは、空氣が鼻腔に抜けるといふ意味です。この場合、鼻腔が共鳴しま

す。ですから、鼻をつまんでば、この發音がうまく出來ません。この性質を利用して、鼻をつまんで、發音してみても、何の障害もなければクヅ、何か障害があればクズ(ク・ズ)と決定する事ができます。

さて、「びかびかづ」の語原は「びかびかといふ」だらうと思ひます。盛岡では、トイフは、すべて、ヅとなります。例へば「東京づ所」「中村づ人」「本當だづ」來たづ」と言ふ風に。ドイツとヅとでは、少し、開きが大き過ぎる様ですが、間に、ヂュー、または、ヂューといふ中間形を置いて考へればいゝと思ひます。「岩手縣釜石町方言誌」の著者は、ピカ／＼ジイ等を、志久清系形容詞の語幹の一部であるし、それに語尾のイを附したものと説明して居ますが、少なくとも、盛岡では、ジイでなくて、ヅです。釜石町には、ジとズとの區別がないと言ひますから、ピカピカジイはピカピカズイと書いても同じ事でせうが、しかし、ズとヅとの間には、マズ(先づ)とマヅ(松)位の距離があります。これは、文法上の問題でなくて、音聲上の問題です。音聲學者に調べてもらへば、すぐ、解決できるでせう。

私が、志久清説に賛成しない理由の一つは、ジイの附く形容詞は、この地方には、存在しないといふ事實に基

きます。「ヒモジイ」や「スサマジイ」は盛岡には有りません。「同じ」は「同じい」となる事は絶対になく、連體形は「同じ事」、終止は「同じだ」と言ひます。つまりシク活用はあるけれども、ジク活用は無いと言ふことになります。もし、ビカビカジイが志久活起原なら、ビカビカシイと清むべきはずです。

ビカビカヅが、はたして、ビカビカトイフから來たとしますと、語原的には動詞なわけです。しかし、活用する形の上から見れば、形容詞とほとんど違ひはありません。たゞ、少し違ふ所は、副詞に、ビカビカヅグを使はないで、ビカビカドと言ふことです。木來、擬容語は副詞なので、これは、當然でせう。また、ビカビカヅクテ(びかびかしての意)の代りに、ビカビカッテと言ふ方が普通です。これは、ビカビカトテ、またはビカビカシテから來たのでせう。

ツ型の形容詞は、必ず、疊語であるとは限りません。ボカッヅ(ぼかっとする。暖い様)、ザワッヅ(ざわっとする。戦慄の様)、エカッヅ(えかっとする。さした様)などいふ様な例もあります。

(完)